

行政視察等報告

(公明党 佐々木厚子)

<視察目的>

出産施設がなくなった安来市にとって、お産はできなくても、産後ケアはどこよりも充実したものにしていかなくてはならないとの思いから、産後ケアの先進事例を学び今後の安来の事業に活かしていけると考えました。また、すい臓がんの早期発見に力を入れておられる尾道総合病院での取り組みを学ぶことにより、市民の健康増進施策に活かしていけると考えたため。

<視察概要一覧>

視察月日	視察先	視察施設	視察内容
令和8年5月12日 (火)	鳥取県鳥取市	鳥取市役所 駅南庁舎	～助産師による産前産後ケア、保健師・保育士による子育て家庭の支援～について
令和8年5月13日 (水)	広島県尾道市	J A広島厚生連 尾道総合病院	尾道方式「すい臓がん早期発見プロジェクト」について

<視察概要報告>

1. 鳥取県鳥取市富安二丁目 138-4 鳥取市役所駅南庁舎多目的室

●対応者：鳥取市健康こども部こども家庭局子ども家庭センターの担当者
こども未来課の担当者

●研修概要：「助産師による産前産後ケア、保健師・保育士による子育て家庭支援」について

〈内容〉

現代社会において、出生率は低下の一途をたどっており、妊娠から出産、子育て支援を行い、育児不安等を解決していく必要があります。

鳥取市は妊娠出産包括支援モデル事業として「助産師による産前産後ケアや、保健師・保育士による子育て家庭支援」を先進的に取り組まれており、その事業内容、効果、利用された方の声、今後の展望などを学んだ。

<考 察>

安来市は、市内で出産する施設がなくなり、近隣の市へ行かざるをえない状況になっています。今年度から始まった妊婦の緊急時における救急搬送の迅速化を図るための「やすぎママサポ 119」や、出産を控えている妊婦が安心して出産に備えられるよう出産施設の近くに宿泊する場合の宿泊費を助成するなど、独自の施策を打ち出しておりますが、産後ケアの充実はもう少し必要ではないかと思っています。

鳥取市は、出産後1年以内の母子等を対象に、市内の産科医療機関や助産所への委託により助産師等によるケアを受けることにより心身の安定と育児不安の解消に取り組んでおられます。出産ができる施設は病院や、産院の4施設ですが、安来では聞き慣れない「助産所」「助産院」が多く、それがどういうものなのか伺ったところ、助産師の資格を持っている人が施設を開設し、ショートステイ、ディサービス、アウトリーチの支援を行っていただけるということです。施設によってサービス内容は違いますが、合計11カ所に助産師、看護師が1名配置され、さまざまな支援をおこなっているとのことで、お母さんにとっては安心して利用できるものだと思います。また、令和5年度から新米パパ育児教室を始められたとのことですが、今は、母親一人が育児をするのではなく父親も共に育児をする時代となりました。とても好評のようで、安来市でも始めていけたらいいと思いました。

その他、鳥取市においてのさまざまな取り組みを伺いましたが、私自身、以前一般質問で、産後ケア事業で「産後ドゥーラ」導入についてうかがったことがあります。産後ドゥーラは産後のお母さんの悩み事をお聞きするのはもちろんのこと、家事支援、こどもの時間内での預かりなど、とにかくお母さんがやってほしいこと、望んでいることを何でもしてあげるという資格を持った専門職の方たちのことです。この方たちが増えるとさらに充実した産後ケア事業になるのではないかと考えています。まだ、産後ケア事業は、家事支援はなく、家事支援は別の事業としているところが多くあるようです。産後ケアを家事・育児全般にわたり支援ができる仕組み作りが必要ではないかと思っています。「産後ドゥーラ」の導入が実現することを願うものです。

ともあれ、安来市で安心して子どもを産み育てられる環境がさらに整えられるよう今後も取り組んでまいります。

鳥取市では多くの担当者の皆さまに対応いただき勉強させていただきました。心より感謝申し上げます。



2. 広島県尾道市平原 1-10-23 JA 広島厚生連 尾道総合病院

●対応者：JA 尾道総合病院副院長

●研修概要：尾道方式 「すい臓がん早期発見プロジェクト」について

〈内容〉

すい臓がんは「かたまり」として見つかった時は手遅れである。その見えないすい臓がんを追い、見えるようにすることに挑み続け、地域の病院と連携をとり

ながら、実践されているすい臓がんの早期診断モデルの尾道方式「すい臓がん早期発見プロジェクト」について学びました。

20年にわたる研究の中で、地域の医師との連携により、尾道市での膵臓がんの罹患率は下がってきました。この成果を活かし、今後行政として何ができるのか。また、個人としては何ができるのかなど「すい臓がん早期発見プロジェクト」についてのお話を尾道総合病院副院長の花田先生からさまざまな角度から伺った。

<考 察>

2年前、私の義姉が膵臓がんで亡くなりました。がんが発見された時には余命宣告を受けるというとても残酷な告白にとってもショックを受けました。なんとか生きたい！との思いで頑張り通し余命宣告より延命し、がん宣告から7ヶ月後に亡くなりました。義姉はとてもアクティブな人で、健康にも気をつけ、誰よりも長生きする人だと皆が思っていました。その義姉を襲った膵臓がんというものはどのようなものなのか、考えるようになりました。また、さまざまながんがあるなか、膵臓がんで亡くなる人が多くなってきたようにも思います。その後、新聞で尾道総合病院の尾道方式「すい臓がん早期発見プロジェクト」のことを知りました。さっそく尾道総合病院に問い合わせ、このプロジェクトを推進してこられた花田副院長のお話を伺う機会をいただくことができ大変嬉しく思いました。以下、ご報告と私自身の思いを述べさせていただきます。

すい臓がんが早期に見つからない理由として早期の75%が無症状であること。腹痛、黄疸で気づく時は手遅れ。エコーでは見えない場合がある。10mm以下の病変は検出困難。有効なスクリーニング（健診）未確立など、早期発見の拾い上げが課題であるとのこと。ではどうしたらいいのか…。日常の診療の中で拾い上げる体制を作ること。明確な紹介基準で迅速な専門精査を行うこと。そのために健診ではなく「診断の流れを設計する」ことで、すい臓がんの早期発見を実現する。これが尾道方式とのこと。診療所での拾い上げ→紹介基準の明確化→中核病院の精査。この一連の流れを医師会、診療所、中核病院、行政が連携し、持続可能な地域連携型診断システムを構築することで、すい臓がんの早期発見を実現されました。この中心者が花田副院長です。色々ご苦労があったようですが、このシステムを構築することで、すい臓がんによる生存率が5年生存率14、9%から20、7%に改善しました。とても画期的なことだと思います。また、私たちがすぐにでも取り組めることとして、「あなたのすい臓は大丈夫？」とのリスクファクターチェックシートによる自己診断があるようです。これなら誰でもできるし、当てはまる事項がある人は自らかかりつけ医に行き、先生に報告することで早めの診断につながるというものです。現在がん検診は集団検診と個別検診があり、大腸、胃、肺、乳、子宮がんの健診はできますが、すい臓がんはまだ検診の対象になっていません。しかし、検診に頼るのではなく自らが日常の生活の中で、取り組めることがあるということはとても大事なことだと思います。現在検診対象になっているがん検診については国の予算化も進み、周知啓発活動がやりやすいのですが、まだまだすい臓がんの特化した取り組みは国を挙げては確立されていないなか、ここまで独自の研究により進めてこられたことに心から敬意を表しますし、私自身、義姉のすい臓がんによって命を落としたことへの無念さからすい臓がんのことがもっと知りたいと思うようになりましたが、私にもできることがあると分りましたのでできることから今後取り組

んでいきたいと思います。

今回の視察は本当に勉強になりました。花田先生はなんとか患者の命を救いたい！医師としての思いを貫いていきたい！といわれた素晴らしい先生でした。偉ぶることなく、どこまでも謙虚なお人柄に感銘を受けました。花田先生だからここまで周囲の皆さまも協力していこうとの動きになってきたと思います。視察を受け入れていただき感謝の思いでいっぱいです。大変にありがとうございました。

